

DRUMATICA (ドラマチカ) / KIYO*SEN (キヨ*セン)



超世代女性デュオ・チームの、1年4ヵ月ぶりとなる第5弾。ハードロックとプログレを取り入れたサウンドが痛快だ

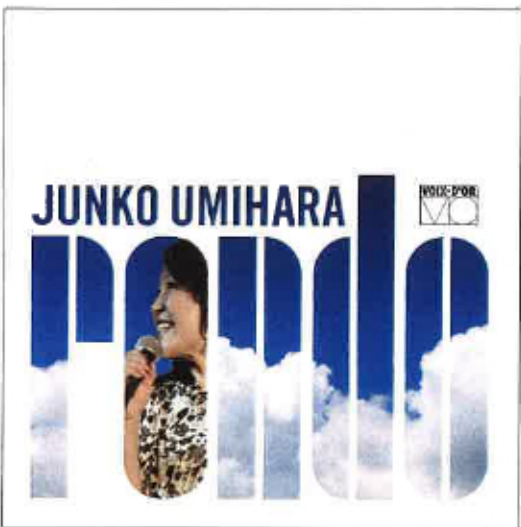
2014年にアルバム・デビューした超世代女性デュオ・チームの、1年4ヵ月ぶりとなる第5弾。大高がカシオペア3rd、川口が国内外のライブ&スタジオ・ワークと、それぞれが活動の場所を持つ二人が、コンスタントなレコーディングを通じてこのユニットを育ててきたことに価値がある。大高のバンド・パートナーで、川口の師匠である菅沼孝三の存在が、二人の絆を強くしているのだろう。カシオペア3rdでは新参で紅一点の最年少ということもあってお姫様の扱いの大高が、本作ではアグレッシブにリーダーシップを発揮する。鍵盤をオルガンに限定せず、キーボードやシンセも導入し、時には重ね技も見せながらの音作りは、キャリアの成せる業と云っていい。川口のドラムは変拍子を含めてどのようなリズム・パターンであっても安定したビートを供給しており、「姉御のプレイにはいかようにも対応するわ」とのメッセージが伝わってきて頼もしい。ユニゾン・イントロと思わせて、結局ラストまでユニゾンを主体とした1分25秒の⑧が、絆を実証。ハードロックとプログレを取り入れたサウンドが痛快だ。(杉田宏樹)

■①DRUMATICA(ドラマチカ) ②ヤング・ホーク ③ウォッチ・アウト・フォー・スリベリ・フロアズ ④サクアド・ユニコーン ⑤スティクトベリア・クネアタ ⑥ロンケイヴ ⑦マイル80 ⑧B.G.M. ⑨ビート・レイヤー ⑩ジャングル・トーン

■KIYO*SEN[大高清美(org,key,syn) 川口千里(ds)] 矢堀孝一(g) 渋谷有希子(b) 8月21~23日高崎で録音

■エレクトレコード Airgroove YZAG-1105 11月6日発売 2,727円(税別)

ロンド / 海原純子



文筆家・心療内科の医師 海原純子の初ジャズ作品。全編を通して生きることの切なさ、素晴らしさが迫ってくる

文筆家・心療内科の医師としても知られる海原純子が、オリジナルとスタンダードを歌う、初のジャズ・アルバム。「ハードルが高く何度もあきらめながらも、また戻って来るのがジャズ」なのだという。身体の内底から発する奥行きのある発声に引き込まれる。①はさりげなく、でもじわじわと沁みこんでくるナンバー。思いを語るような、人間的に大きなスケールを感じる。②はカラッと明るくスイング。④⑤は「命のつながり」をイメージして自ら作詞、スティーブ・サックスが訳詞、若井優也が曲をつけたオリジナル。④は時間の流れを慈しむ歌詞で、過ぎた時間をしっかりと振り返る。⑤はボルトガル語で、フルートと対話するように繊細に歌う。⑥はたっぷりとしたテンポでベースと絡む。途中、スキヤットがなんとまあやらしい声の感触を生々しく表現していて、味わい豊か。⑨は対照的にぐっと軽やかなサンバ。バンドと一体になって進んでいく感じがいい。⑩は若井のピアノとデュエットで、包み込むように歌う。全編を通して生きることの切なさ、素晴らしさが迫ってくる作品だ。(山本美芽)

■①エヴリシング・ハプンズ・トゥーミー ②ギヴ・ミー・ザ・シンプル・ライフ ③エンブレイサブル・ユー ④ゼン・アンド・ナウ ⑤オ・コント・ダス・ヌヴェンス(雲の物語) ⑥アイ・ガット・リズム ⑦ザ・ボーイ・ネクスト・ドア ⑧ムーンレイ ⑨イット・マイト・アズ・ウェル・ビー・スプリング ⑩オーディナリー・フル

■海原純子(vo) スティーブ・サックス(as,fl) 若井優也(p) 伊地知大輔,安川大樹(b) 海野俊輔(ds) 2019年7月14~16日東京で録音

■日本ウエストミンスター Voix-D'or JXCP-1119 発売中 3,000円(税別)